

電子記録のアーカイビング

小川千代子著

東京 日外アソシエーツ株式会社 2003. 12. 25

213p 21cm 2800円(本体)

紙の記録ばかりでなく、電子記録もアーキビストの管理すべき物になりつつあること、またアーカイビングは、元々はコンピュータ技術者の間で使用されていた言葉であることを踏まえて、この本を紹介したい。

本書の外側に巻かれた帯のキャッチコピーには次の言葉が記されている。かなり理解しやすく本書を紹介していると思う。

「現代は未来からみたら記録の暗黒時代？」

—電子記録はそのままでは長くもたない—

- ◆ デジタル化と記録を保存することは同一ではない。
- ◆ 世界規模で、電子記録の長期保存＝アーカイビングは大問題とされている。
- ◆ 国内外のアーキビストによる電子記録の長期保存についての見通しや研究動向をわかりやすく解説。

「本書は、2001年8月ごろから『行政&ADP』（社団法人行政情報システム研究所発行）誌上に隔月連載した「電子記録のアーカイビング 世界探訪」全10回分を基本として取りまとめたもの」（あとがき）より、に多少の書き下ろしを加えて構成している。

本書の構成は、第I部から第VI部と終章1つが本編で、付録に勧告や決議などの記録・調査をまとめ、索引（本書使用の用語索引）、あとがき（本書執筆の経緯）、本書の記事の初出一覧からなる。

さて、書名のアーカイビングは、長期保存のことで、つまり「電子記録を長期保存するには」というのが、本書のテーマである。

なお『電子記録のアーカイビング』についての言葉の定義は第VI部の113ページで初め

て説明されているので、もっと前の部分で説明していただけたらと感じた。

紙に墨で書かれた記録は1,000年以上経ても十分に人間の肉眼で読むことができる。しかし、電子記録はハードとソフトの進歩が恐ろしく早い速度で進んだ結果、ここに1枚のフロッピーディスクがあった場合、肉眼では中身は分からない。今やワープロは生産中止、最近のノートパソコンにはFD用ドライブは標準では搭載されなくなってきている。ましてや、近い将来レコードやオープンリールのテープの音声はどうやって聞けばよいのだろう。レコードやフィルムやテープをそのままの状態、カビさせずに保管することがアーカイビング=長期保存ではなく、その中身をみたり聞いたりする方法の保存を考えなければ長期保存といえないのである。

西暦2000年を過ぎてようやくこの問題を考えようということが世界も日本も始まったばかりだという。

「アーカイビング」はそもそも、コンピュータ技術者用語で、『データをオンライン利用からはずしてオフラインのストックに移して、将来とも使えるように備えるマイグレーション』の意味で使われる言葉』だという。

アーキビストは、これらの電子記録の長期保存を考える必要に迫られている。なぜならば、記録媒体の長期保存耐用性について問題があることはあまり知られていない。

ICA第14回大会決議勧告(2000年9月セビリャ開催)には、

「電子記録と情報技術IT

1. アーキビストは、電子記録は物理的に原形態のまま保存を続けることが不可能であるという認識に基づき、真正電子記録の内容及びその機能を継続的にアクセス可能とすることを確保すること；」(部分)とある。

つまりここでは、電子記録媒体そのものの長期保存をアーキビストが考えるのではなく、

その媒体の中身を適切に保存することを謳っている。ということは、結局 メタデータをくっつけた状態で印字した紙を保存することになるのである。やっぱり「紙」しかないのかと思う。

そこで世界の電子記録への対処の動向をみると、政策的にデンマークが最も進んでいて、その次に位置する英国・ヨーロッパと、それらの国々に追従するようなアメリカ合衆国やアジア各国や日本の実例をあげている。

この分野での先進国であるデンマークを視察したという事例では、まさに紙に印刷して保存している状態のようである。過渡的とはいえ、電磁記録は本当に不信以外何物でもないシロモノなのである。

日本としては、全史料協がこの問題に取り組み始めたのは、まず2001年に問題を指摘したことにとどまり、その翌年の2002年全史料協富山大会の分科会の1テーマになったあたりからというようにまだこの問題への対処には日が浅く、ふつうに知られるまでにはまだまだ時間が必要である。

公文書保存は、紙媒体の簿冊を保存するという段階から、すでに行政側は公文書を電算処理で推進しはじめているし、電子政府の存在もある。

一瞬の停電や、一瞬のクリックのような何かのはずみで記録は即座に消えてしまう。数年で電磁媒体は劣化する。新しい媒体に移し替える手間(10年ごと)と費用による経済的損失が非常に大きいという。

紙は置き場所をとる・検索が難だが、劣化については酸性紙でなければ100年はまず大丈夫であることに比べれば、「電子記録は劣化が早い・早過ぎる」のが欠点であることがはっきり見えて来た。デジタル化は便利だが、保存には向かない、ほどほどにということなのである。

最後にコラムについて、本のタイトルや本文の内容から受けるイメージが少しかたいので、随所にあるコラムが一服の清涼剤になっている。デジタルと日常の関わりから起こる

身近な話題が満載である。

相京 眞澄・千葉県文書館

古文書はこんなに面白い

油井 宏子著
柏書房 2005.3
21cm 本体1,800円

本書は古文書講座の講師を長年つとめてきた著者の、古文書（近世史料）と歩んできた一里塚的な著作である。

最近古文書を習うための、参考書、辞書類が豊富に出版されるようになってきた。古文書講座もあちこちの自治体等で開かれている。

さてこの本の読者は、本書の主人公10歳のおでんちゃんと、11歳の友八君といっしょに、文字を覚え、友達と遊びながら古文書の楽しい世界に浸ることになるだろう。

くずし字のくずし方は勿論、当時の社会に生きていた庶民の暮しがそこそこに散らばっている。目の前におでんちゃんや友八君がいて、読者といっしょに文字の練習をし、厳格な先生に叱られ、寺子屋と家の通学帰りの道草をくう様子までが浮かんでくる。

寺子屋で基礎学習を学び終えた子は、商家へ奉公に出る。友八君は白木屋という江戸でも大店中の大店へ就職した。商家は商人となるためのさらなる教育をする。お店にはお店の規則もある。そんな窮屈な奉公はまっぴらと逃げ出したいくなる子もでるだろう。それも、お店の大事な荷物を背負ったまま逃げ出した友八君は、その後どうなったのでしょうか。

さて、寺子屋の授業料は庶民への負担がさぞかし大変であったろうと思うのだが、実はお金で払える層はお金を払い、農作物が出来た時点で作物を持っていくのでも何でも良しとしたことが、すばらしい識字率の高さとなっていて、これは江戸後期から幕末期に來日

した外国人の記録に残っている。コラム参照。

明治期になって学校制度を一律にして授業料を払えなくなった子や学校資本金の寄付に耐えられない農村もあったことを考えると、江戸時代は暗黒ではなかったと思えてくる。と思ったら、第3章に「イメージだけを膨らませるのは危険です。ひとつひとつの史料を大切に、個別事例を積み上げていく必要があります。」と指摘されてしまった。

著者は「江戸時代を過小評価も過大評価もせず、史料に基づいてひとつひとつ検証していくことは、何よりも重要なことだと思っています。」と我々に警告している。

ある文字のくずし字を辞典で調べた時に別のくずし方も同時に見ておく学び方がある。

ここでは、辞典を引かずとも「ちょっと確認」できまざまなくずし字を、同時に学べるように工夫してある。初学者はこの方法でも良いが、いろいろな辞典を引くことも勉強の一つなので、億劫がらずに辞典を引くことを忘れないように願いたい。

何しろ、作者自身が古文書を読むのは楽しくて楽しくてたまらないということが随所に見え隠れしている、すてきな古文書入門書である。古文書を学ぶ姿勢を学ぶ本である。

古文書をまだ習っていない人も、まだ目の浅い人も、長く古文書を学んできた、という人もみな、古文書を読むという基本姿勢をこの本からまず学びとっていただけたらと思う。一読を薦める所以である。

相京 眞澄・千葉県文書館